

サブカルチャー研究における 論争点についての一考察

笠 間 千 浪

I 〈文化的転回〉をめぐる論争

社会学を含む社会科学の認識枠組みに深い影響を与えた 20 世紀前半の「言語的転回 (linguistic turn)」に続いて、第二の転回としばしば表現される「文化的転回 (cultural turn)」¹⁾ は、さまざまな論争を生じさせてきた。この 20 世紀末 (80 年代から 90 年代を頂点とする) における、人文科学だけでなく社会 (科) 学も含めた「文化」の主題化の「増殖」現象は、とくに「経済的要因」を重視する立場から危機感を伴って批判の対象になってきた。そして、この論争はラディカルな左派陣営を分断させる深刻な要因ともなっている。

その論争において、経済的要因を重視する側は、きわめて明確な〈文化—経済〉対立図式に基づいている場合が多い。一方、文化的要因に着目する側も一部では、そういった明確な対立図式を踏襲しているが、その多くは〈文化—経済〉の明確な二項図式で考察することへの懐疑を問題意識として持っている。この両者の認識枠組みの分断が、社会的および文化的な抵抗運動や異議申し立てについての解釈にも影響を与えている現状がある²⁾。

マルクス主義の系譜にある文学批評家の T. イーグルトンは、前者の

代表的な論者であるといってもよいだろう。イーグルトンは『文化とは何か (2000)』の中で、文化概念の「インフレ状態」について辛口な分析を行っているが、そこで主な批判の対象となっているのは、「大文字の文化 (Culture)」に対する「小文字の文化 (culture (s))」である。大文字の文化は、「普遍的な超越性を標榜する」文化であって、西洋中心主義な歴史で流通してきたものでもあり、これに対してもイーグルトンは問題なしとはしない。

だが、1960年代以降に突出してきた、「特殊個別的な（民族的・性的・エスニック的・地域的な）アイデンティティを肯定する」小文字の文化は、「統一のとれていない有象無象の諸種雑多の敵対勢力の集まり (Eagleton, 2000=2006: 103)」であり、結局は「支配的政治体制」にとって敵ではなくなってしまうと指摘する。一番の問題は、「国家とか階級とか政治組織などその他もろもろの問題を文化問題に従属させる」ことにより、真にラディカルな変革を逃してしまっているということである、という (Ibid: 104)。

このイーグルトンの指摘は、完全に的外れということではないだろう。また、イーグルトンは、文化を卓越（礼節）文化、アイデンティティ（エートス）文化、商業文化という三つのタイプに分けながらも、もうひとつ抵抗文化という側面も指摘し、これらの相互な無限の組み合わせによって様々な文化のタイプが出現してきたとの的確にも分析している。

とはいうものの、イーグルトンの理解においては、しょせん文化は、「戦争、飢饉、貧困、環境汚染、民族移動などの物質的な次元の問題」を扱うことはできず、それは経済や政治の領域であるゆえに、現在の文化的関心が高まれば「政治からの分離」現象として憂慮される事態ということになる。このイーグルトンの一貫した立場は、先に指摘した〈文化—経済〉という境界確定的な二項図式的解釈の土台の上に成り立つ。

そのうえで、現在の女性やマイノリティの異議申し立ては、ほぼ「アイデンティティ政治」に収束しているという判断を下している。

イーグルトンのいうアイデンティティ政治とは、「集団主義的あるいは共同体主義的で、特殊個別なアイデンティティを追求する動き」である。たしかに、女性や各種の周辺化されたマイノリティの異議申し立て運動には、特殊個別的で、しばしば閉鎖的な方向にむかうものも少なくはない。だが、そういった動きを単なる文化の「特殊性」や「差異への礼賛」という局面で一括するのはあまりにも一面的な解釈ではないか。

たとえば、フェミニズムの場合、19世紀から20世紀前半にかけての第一波において、政治的権利の獲得が中心であった。が、その権利がほぼ達成された後も性別分業形態や女性を男性の補助役とみなす状況は続き、それが1960年代のフェミニズム第二波を引き起こした。そこでは「性政治 (sexual politics)」「性別秩序 (gender order)」という文化的次元の領域がいかに（政治経済の領域を含めた）権力／支配と連動しているのかが重要な課題として浮上してきた経緯がある。それなのに、イーグルトンの主張では、あくまでも経済や政治の次元で運動をすべきであって、「曖昧な」文化の次元での模索は「特殊個別のアイデンティティ政治」に矮小化されるとするかのようである³⁾。

それに、イーグルトンはポピュラーカルチャーやサブカルチャーが社会に浸透している現在の高度消費社会の現状を「ポストモダン文化の席捲」として憂慮し、徹底的な批判をするのだが、そのような立場はいかにも「高踏主義」的な視点であるともいえる。なぜならば、消費社会においては、ポピュラーカルチャーの浸透度は極めて広く、また同時に貧困化すればするほどポピュラーカルチャーのみに日常的にさらされている状況が理解されていないからである。

社会学においては、人々の関心や行為が「文化」領域に傾いていると

される状況があれば、その社会的現実自体をまず分析し、それがどのような意味を持つのかを検討しなければならない。したがって、最近の社会学でサブカルチャーやポピュラーカルチャー、マスメディア、デジタル技術を媒介としたネットワークなどがますます注目されるのは当然のことといえる。

Ⅱ サブカルチャー研究の系譜

C. ジェンクスによれば、社会学における文化への着目は長い歴史を持つ。文化を考察することは、必ずしも社会構造や経済などの次元との分断を意味しない。しかも、社会学ではマクロな「社会」概念をそのまま具体的な分析対象とすることはできず、社会のより部分的な社会を具体的に扱うことによって、社会概念の考察をしてきた経緯がある。したがって、サブカルチャー概念の「考古学」的検討を試みれば、創成期の社会学にすでに現在のサブカルチャー研究で使用されたり、再検討されている概念が登場しているという。たとえば、テンニースにおけるゲマインシャフトとゲゼルシャフト概念の比較考察、デュルケムにおける機械的連帯に対する有機的連帯という近代社会の編成の仕方、正常と病理の区別を研究者が持つ先入観で歪めないような社会学的方法論としての「戦略的客観性」の必要性などに豊富に見出される。また、M. ウェーバーの正当性の三類型の考察、マルクスの「ルンペンプロレタリアート」への着目なども後のサブカルチャー研究に通じるものがあるという (Jenks, 2005: 4-6)。

だが、より現在の内容に近いサブカルチャー研究の系譜をたどるとき、英米という二つの系譜と、以下の時期区分がなされることが多いであろう。

- (1) 米国における系譜
 - 1) シカゴ学派 20 世紀前半から半ば
 - 2) 第二次大戦後～1970 年代
- (2) 英国における系譜
 - 1) バーミンガム学派 (バーミンガム大学
現代文化センター: CCCS) 1964～
 - 2) CCCS 内部からの批判
 - 3) ポスト CCCS 派～ (1990 年代～)

ただし、サブカルチャーという用語が初出するのは、第二次大戦後の文献で、M. ゴードン (1947) がナショナル・カルチャー (国民文化) の機能的な下位区分として階級・エスニック・地域性・宗教的などの特質を持つ文化と定義した。このようにナショナル・カルチャーと関連付ける同様な定義がこの時期に他にも現れている (Ibid, 2005: 7)。

(1) 米国における系譜

1) シカゴ学派

サブカルチャーという用語が確定する以前に、初期シカゴ学派は犯罪者や非行などを都市環境における社会問題として取り上げ、参与観察によって分析を開始した。

シカゴ学派の犯罪や非行集団への注目は、それらを法的またはロンブローゾのように生物的に扱うのではなく、都市における (特に若年層の) 人間行動の社会学的研究という見地から扱ったが、初期のうちの焦点は社会病理問題としてであった。だが次第に、シカゴ学派の研究者たちは、非行集団を一般社会とかけ離れた価値を持つ集団とみなすより、一般社会の価値観を共有し、消費社会における逸脱行動が合理的な計算

からなされていることへの着目に移行していった。また、A. コーエンによる若年ギャング集団の考察は、サブカルチャーを「集合的問題解決の手法」とみなしたが、それはいまだ「社会的適応」の視点からであった。

ところが、ラベリング論の代表的論者である H. ベッカーは『アウトサイダーズ (1963)』において、単なる社会的適応という視点を超えた。逸脱者ラベルとそれに抵抗する逸脱者側とのあいだの象徴的相互作用に着目することによって、逸脱者側の自己規定が逆にラベルを貼る外部者を逸脱者として再規定する相互的なダイナミズムに光をあてたのである。そこに、「社会の支配的な価値を相対化していく契機を含んだ一定の集団の文化的世界」という今日的な観点のサブカルチャー概念の起点をみることもできるという (吉見、2000: 34)。

2) 第二次大戦後

戦後の米国社会学においては、「対抗文化」の概念化に「コントラ・カルチャー (Yinger, 1960)」概念が提案されたりしていたが、T. パーソنزの構造機能主義のもとで、文化は社会秩序形成における機能として説明される手法が影響力を強めた。そのため、逸脱とみなされる行動などはすべて実証犯罪学や社会病理学に囲いこまれる事態が生じたという (Jenks, 2005: 6-7)。

(2) 英国における系譜

1) バーミンガム大学現代文化センター (CCCS) ⁴⁾

サブカルチャー研究において、大きな影響力を持つことになった CCCS を中心としたカルチュラル・スタディーズは、大きく分けると

R. ホガートが CCCS を設立し、所長をしていた前期と S. ホールの所長以降の後期に区分できよう。

前期の代表的論者であるホガートと R. ウィリアムズは、英国ニュー・レフト陣営における労働者階級文化の主題化を行った。それは、まず戦後の圧倒的な物質文化の浸透に対抗して「有機的な労働者文化」復活への希求があったとされる。ホガートの『読み書き能力の効用 (1957)』では、労働者階級がリテラシーを獲得していくうちに大衆文化が浸透し、どのように（特に若年層が）彼らの民俗（フォークロア）文化を変容させていくのかが検討されている。

ウィリアムズは、マスメディアも含めた広い領域の文化を扱い、理論的な貢献をしたとされている。伝統的マルクス主義の「経済という下部構造が文化などの上部構造を決定する」という見方や、文化を政治や経済と分断された周辺的なものとする見方を退けて、文化そのものが歴史を作っていくような「社会全体の、生活様式の全体」「生き方の形式」として提示した。また、この時期の E. トムソンは、「闘争様式としての全体」として文化をとらえ、『英国労働者階級の形成 (1963)』では、労働者階級という「行為体／エイジェンシー」形成の歴史をなぞった。

総じて、前期の CCCS は「逸脱ではない正統な労働者階級文化」を伝統的マルクス主義の視点から論じるのではなく、よりプロセスを重視したダイナミズムのうちに支配関係をみていく視点のなかで、米国ポピュラーカルチャーの浸透とともに「非正統的な労働者階級文化＝労働者階級文化の変容」という現象に気づいていったことになるろう。

ところで、H. ホール以降も CCCS は続いたので、ホールで CS の後期をすべて語ることはできないにしても、1969 年に所長に就任して以来の約 10 年間の仕事は CS におけるサブカルチャー研究の方向を導いたといえる⁵⁾。多くの論者が指摘するように、ホールの CS への貢献は、

大陸ヨーロッパの構造主義理論（ソシュール、レヴィ＝ストロース、罗兰・バルト、アルチュセール）や A. グラムシのヘゲモニー概念などの導入といわれている。このような理論的装置によって、「文化＝意味形成活動＝ヘゲモニーをめぐるせめぎあいの場」との定義がなされ、マスメディアや若者文化分析への新しい道を拓くこととなった。このことは、従来の米国流の「マスメディア＝現実の中立的な伝達手段」説を覆し、「受け手（オーディエンス）」側の「新しい意味やスタイルの創出」にみられる複雑なプロセスに注目させる潮流を形成した。

英国における 1960 年代から 70 年代にかけて労働者階級の均一性は崩壊したかのようにみえたが、ホールたちは『儀礼を通じた抵抗（1976）』という論文集において、労働者階級の若者たちのサブカルチャーがいかに階級的な従属的位置からの「抵抗」「自分たちなりの矛盾の解決」となっているのかを示した。ホールらにとって、労働者階級の若者のサブカルチャーは、「継続的な折衝と闘争に基盤をおく新たな形態の抵抗」の手段であった。

その後も、CCCS 派の研究者たちは大衆消費社会化によって、一見して「階級区分の後退」にみえる状況をより詳細に分節化する作業をおこなったが、その中には P. ウィリスの『ハマータウンの野郎ども（1977）』などのエスノグラフィーも多く含まれていた。CCCS の CS は、サブカルチャーを「階級的な（および世代的な）従属的位置からの日常的抵抗」「（労働者階級が）直面している矛盾を解決する魔術的な試み（Clarke 1976: 189）」「スタイルを通じた新しい意味の創出（Hebdige, 1979 = 1986）」としてみなしたといえる。

2) CCCS 内部からの批判

CCCS の提示したサブカルチャー解釈は、しばしば断じられるように

それほど単純なものではない。しかしながら、やはり中心となる主題は労働者階級の若者たちの「世代的葛藤」および資本制社会における従属的位置からの「抵抗」であった。しかも 1970 年代までの CCCS の注目対象は、「白人労働者階級の若者層男性」であったので、まずは CCCS 内部からの批判によって、ジェンダーと「人種」の軸が欠如していることが暴露された。

まず、「人種」の軸であるが、CCCS が初めて「人種」要因を主題にした論文集を刊行したのは、1978 年の『ポリシング・ザ・クライシス』であった。それは、70 年代前半に起こった「マギング（強盗）」をめぐるモラル・パニックを「人種」の切り口で分析したものであったが、CCCS の伝統のなかで「人種」軸を正面に据えることは西インド諸島出身のホールでさえ、かなり時間を要したことになる。

「人種」要因をテーマ化した代表論者である P. ギルロイは、「イングランドらしさ」を中心としたナショナリズムは、CCCS においてもなかなか払拭されなかったと指摘する。戦後に旧植民地から継続的に移民が流入し、労働者階級とくに若年層が移民に敵対しつつも、一部では交流していくという複雑なプロセスがあったのにもかかわらず、「人種」の軸が常に周辺化されていた要因には、「人種」や移民のもたらすエスニシティも最終的には英国社会に同化や統合にいたるとみなす左派言説にあるとした。「純粹かつ同質的な英国民性」という同質幻想が階級要因だけでなく、「人種」要因も不可視にしてしまうのである (Gilroy, 1987: 68)。

ジェンダー要因についても、CCCS 内部のフェミニズム側からの「介入」によって認識させられるかたちとなった。A. マクロビーと J. ガーヴァーは、1975 年の時点（『儀礼を通した抵抗』）ですでに CCCS のサブカルチャー研究に女性／少女の存在が欠落していることを指摘してい

る (McRobbie & Garber, 1976)。

1978年には、女性研究グループによる『女性は異議を唱える：女性の従属化の諸側面』という CCCS 初のフェミニズムの論文集が出版された。そこで、編者たちは、「フェミニストの争点に対する CCCS のあきらかな無関心の継続」そのものについて告発できないとしたら、CS とは男性支配の実例に他ならないと主張したのであった (Turner, 1996 = 1999: 309)。マクロビーは、ウィリスやヘブディジらに共通する男性を特権化する視点を批判した。それは、CCCS の男性研究者が少年たちのサブカルチャーに「抵抗」や「反抗」を読み、また暗に感情移入したとしても、その同じ「抵抗」や「反抗」が女性／少女の側からすると、「抑圧」や「支配」に転化した状況をもたらすという「位置」の問題であった (McRobbie, 1981)。

このようなフェミニズム側からの介入について、ホールは当時の驚きと戸惑いを、「CCCS に家父長的にフェミニズムを導入しようとしていたそのときに、フェミニズムは自律的に現れて、私たちの度肝を抜いた」と表現している (Hall, 1996: 25)。結局、ホールはフェミニズムの異議申し立てに対して、真摯に答え、理論的格闘を続けていくことが CS の態度であるとみなすようになる。

あらゆる社会的実践や支配形態が——左翼の政治も含めて——つねに性的アイデンティティや性的位置どりに刻印され、それによってある程度保証されているという認識から引き起こされた、思考の革新に関わっているのである。もしも、ジェンダー化されたアイデンティティがいかに形成され変換されるのか、またそれがいかに政治的に利用されるのかということに注意を払わないとすれば、社会における権力の制度化を理解するために使うことのできる十分説得

力をもった言葉や、変化にむけての隠れた源泉を手に入れることなど、できないだろう (Hall, 1989=1998: 78)。

また、『帝国の逆襲 (1982)』においては、H. カービーが「白人女性よ、聞きなさい! : 黒人フェミニズムとシスターフッドの境界」において、ジェンダーと「人種」が交錯する状況分析に注意を促し、各要素の「重層的な」作用への視点を提示した。

3) ポスト CCCS 派

1990年代になると、CCCSとは異なる視座でサブカルチャーをとらえようとする動きが活発になってくる。とくに言及されるのは、サブカルチャーとされる「スタイル／儀礼」が階級等の軸と非対応になってきたという点についてである。たしかに、CCCSの分析においても、デヴィ・ボーイ、モッズ、スキンヘッドやパンクなどの労働者階級の若者たちのサブカルチャーには、消費行動や商品／モノへの執着が濃厚な影を落としており、それは資本主義的な条件や商品文化への「回収」といった側面として理解されていた。だが、サブカルチャー研究の一部の新世代は、CCCS派の仕事への明白な対立的立場を前面に出すようになる。

契機になった出版物は、K. ゲルダー & S. ソートン編集の『サブカルチャー・リーダー』(1997)である。すでに90年代にはCCCSとは異なるサブカルチャー研究を標榜する論考⁶⁾がでていたが、97年のアンソロジーはそういう傾向をまとめて方向付ける編集となっている。このアンソロジーは8つのパートに分かれているが、最初の3つのパートで、CCCS以前のサブカルチャー研究の社会学的系譜をシカゴ学派から検討し、CCCSの代表的論文をまとめたパートでは、いわゆる「CCCS的アプローチ」の特色をまとめている。

2000年には、D. マグルトンの『インサイド・サブカルチャー』が出版される。その後、2001年に「ポストサブカルチャー」をテーマとするシンポジウムが開催され、2003年には『ポストサブカルチャー・リーダー』というアンソロジーが出版されている。

それでは、「ポストサブカルチャー研究」側にみられる性格とは何であろうか。実はすべての「ポストサブカルチャー派」がCCCSを批判しているのではない。中には、CCCSを土台にしてそれを発展させる方向を目指していることも多い。しかし、90年代以降の「(ポストモダン時代の) グローバル化とローカルなサブカルチャー現象 (ファッション、音楽、スポーツ、クラブ、パーティ、レイヴなどに関するもの)⁷⁾ の両者が交錯し、同時に新しい混種的な文化配置を創り出す状況のなかで、断片化し、流動化している (サブカルチャー当事者の) 経験をどのように再理論化・再概念化するのか」(Weinziel & Muggleton, 2003: 3) という問いの比重が高いとみてよいだろう。「CCCSは、労働者階級の若者文化を記号的ゲリラ戦を通して従属に英雄的に抵抗している」ととらえたが、「そのような一種のロマンチズムを避けて、より実践的なアプローチをとるべきだ」とする (Ibid: 4-5)。

また、ポストサブカルチャー研究の模索には、二つの傾向がある。第一には、CCCSの理論的枠組みとは別の新たな理論的装置を探そうとする傾向である。その中で、P. ブルデュー、J. バトラー、M. マフェゾリらの概念や理論枠組みがしばしば参照される。たとえば、ソートンはブルデューの「文化資本」概念を流用し、「サブカルチャー資本」というものがサブカルチャー内部者／当事者にとって、自らの生活の糧を得る重要な資源になるとともに、サブカルチャー内でのステイタスの確立にも影響していることを指摘した⁸⁾。バトラーの「パフォーマティヴィティ」概念は、サブカルチャー当事者のアイデンティティの構築を説明

するのに使用され、マフェゾリの「(ネオ) トライブ (部族)」概念は、「美—感性的な共同性」による「ネオ・トライブ」としてサブカルチャーをとらえるものとして使われ、従来の階級、宗教、思想などとは異なるアイデンティティ形成がその場／空間でなされていることを示唆している。

第二の傾向は、第一の傾向の延長線であるが、サブカルチャー概念・用語そのものの刷新を提案することである。例として、「チャンネル」「サブチャンネル」「一時的地下ネットワーク」「クラブカルチャー」「ネオ・トライブ」などが互換的に使用されている (Ibid: 5-6)。

こういった一連の考察の中で、特に CCCS 的なアプローチに対する明確な批判的位置を提示している論者はマグルトンである。マグルトンは、サブカルチャー分析のための自分の方法論を「ネオ・ウェーバー派アプローチ」と名づける。その特色として、①サブカルチャー当事者の主観的意味を、既存の統一化する理論で推測するのではなく重要視すること、②社会的現実に関して、実在論ではなく、唯名論的立場をとること、③サブカルチャーを経済的社会的な要因と直接関連付けるのではなく、文化的価値の独立的な解釈的役割を重視すること、だという⁹⁾。

そのため、マグルトンはパンク・サブカルチャー当事者へのインタビューを実施し、「内部者の主観的な声」を使用することによってサブカルチャー分析をしていく。マグルトンにとって、サブカルチャーは CCCS が分析したような集合的な階級やエスニシティに固定された社会的対立ではなく、「ルールや構造、コントロール、慣習的なライフスタイルからの自由」が主要な関心事になっていると指摘する。そういった自由の追求が、普遍的でマクロな次元でなされるのではなく、「個人的で流動的な普通の人のミクロな次元でのポリティクス」で日常的に行われる一つの実践であるという。サブカルチャーとは、「自己表現、個人

的自律性、文化的多様性の表明」であり、「個人主義の集団的な表現と賛美」であるとみなし、あくまでも個人的表現が中心的な性格であるとするのである。

Ⅲ ポスト CCCS 派をめぐる議論

現在のサブカルチャー研究における争点は、ポスト CCCS 派の主張をめぐる生起している。それでは、マグルトンを中心としたポスト CCCS 派の主張において、まず、どの点が納得できるものであるのか。

第一に、CCCS がいささか強引にサブカルチャーに労働者階級の抵抗や反抗を読み込んだことに対する批判である。先に言及したように、CCCS 内部においても、CCCS の伝統でもあった「労働者階級の白人男子若年層の抵抗」は、移民や女性に対しては、自分たちのアイデンティティの形成と「名誉」の底上げのために、むしろ既存の権力／支配関係を行行使する側にまわることもしばしばであったことが批判されてきた。そのことだけを考えてみても、彼らのサブカルチャーが「体制的秩序への抵抗」であると断定できないことはすぐに理解できることである。

もともと、CCCS は中産階級若年層の「カウンターカルチャー」と労働者階級若年層「サブカルチャー」を区別しており、「サブカルチャーの抵抗のあり方」の方が「カウンターカルチャーの抵抗のあり方」よりも「解説しにくい」としている¹⁰⁾。そのところを、研究者側が「積極的に抵抗を読解」してしまったと批判されているわけである。

また、現時点からみれば、各種のサブカルチャーとされている現象を概観しても、それらは「抵抗」の様式というより、ポスト CCCS 派のいうように消費行動における快楽や感性の連帯、あるいは「自由」追求とみたほうが的を射ているものがほとんどであると思われる。ただし、

サブカルチャーの中にはたしかに「抵抗」の軸を強く持つものも少なからず存在する。そのあたりの細かい分析をどのようにするのが課題となっている。

第二に、サブカルチャーの形成や当事者たちのアイデンティティ形成が、「主流文化 対 サブカルチャー」というような二項間の対立だけで形成されているわけではないことを指摘した点である。現象学的分析の視点の導入がサブカルチャー当事者の中も均一ではなく、主流文化も含めたさまざまな「サブカルチャー的他者」が交錯している状況がサブカルチャーそのものを形成していくという状況の把握を可能にしたことがある。

それでは、ポスト CCCS 派の提起した視点がもたらす問題点には、どのようなものがあるのだろうか。概略的に言えば、それはポスト CCCS 派が CCCS との立場を批判しようとしてできるだけ距離をとるために、CCCS が提起したサブカルチャー分析の意義まで全否定しかねないことである。

マグルトンやソーントンなどのサブカルチャー分析で繰り返し主張されるのは、サブカルチャーは階級、エスニシティ、「人種」、ジェンダーなどのカテゴリーを軸とした対立ではなく、自由や感性、悦楽などの一体化をめざす、個人をベースにした消費空間での横並びの連帯ということである。すでに述べたように、たしかにサブカルチャーの多くはそのような性格を持つものであることは確かであろう。だが、ポスト CCCS 派は、CCCS 派が重要視した文化領域における権力／支配関係およびそれへの抵抗や反抗という作用まで根こそぎ否定しているかのようである。そのようなスタンスは、自らが批判する CCCS の「単純な二元的理解」と同様なものとなってしまっているのではないだろうか¹¹⁾。

IV サブカルチャー研究における現在の争点

ポスト CCCS 派の登場で、現在はサブカルチャー研究における活発な議論がサブカルチャー概念の再定義などを含めて生起していることはすでに確認した。ここでは、第一に 1980 年代以降の時代状況変化とサブカルチャー変容の問題と、第二に、サブカルチャーにおける権力／支配関係と「抵抗」の軸という二つの争点にふれたい。

1) 時代状況変化とサブカルチャー

とりわけ 1980 年代以降の経済社会的、文化的な変容はこれまでも議論されてきたポストフォードイズム、グローバル化という概念のもとで、より理解ができると思われる¹²⁾。大量生産—消費をささえる工業中心的生産体制であるフォードイズムから、健康、教育、介護、金融、運輸、エンターティメント、広告などのサービス産業の拡大（経済のサービス化）を中心とするポストフォードイズムへの変遷は、市場原理主義と空間的な越境の加速現象であるグローバル化を伴ってきた。そこでの労働は、以前にも増して知識、情報、情動やケア、コミュニケーションなどの領域における「非物質的労働」（ネグリ & ハート）に重点がおかれている。

ポストフォードイズムの性格とは、空間や時間の脱中心化ともいえるべき現象を伴い、それに対応するように生産体制、労働のあり方、消費財、生活様式などが多様化、断片化、複数化、多元化、差異化していき、すべての領域で「柔軟性」が帯びていくことである。そして、この柔軟性は、世界的な労働力再編過程を招き、低賃金の非物質的労働（とくにケア労働）への需要を拡大させ、それは国内だけでなく国境を越える労働

力移動を推進させる。

Z. バウマンは、ポストフォーディズム以降の社会を性格づける用語として「リキッド・モダニティ」における流動性／流動化を提出したが¹³⁾、このような認識とポスト CCCS 派のサブカルチャー分析とは類似性がある。すなわち、ポスト CCCS 派は、CCCS のサブカルチャー分析が「固定・集团的アイデンティティ・垂直的図式・反抗・非日常的」であるとし、現在のサブカルチャー分析は「流動化・個人的アイデンティティ・自由・水平的ネットワーク・快樂主義・日常的」としてみるべきとした。このことは、ポスト CCCS 派の観点そのものが、いわゆるポストモダニズムの立場をとる論者であることを示している。つまり、ポスト CCCS 派は、サブカルチャーの分析や方法論そのものへの刷新を提議しているというよりは、「ポストモダニズムの立場からみたサブカルチャー概念」を提唱しているにすぎないことになるのではないか。

それゆえに、今後は研究者側の依拠する観点からサブカルチャーをあらかじめその性格を予測されたものとして分析するのではない方向を探らなくてはならないだろう。サブカルチャー研究の活性化の一つは、そのことへの要請が契機になっていると思われる。

一例として、これまでのサブカルチャーのモデルの理念型を抽出してみれば、①共同体モデル ②アリーナ・モデル ③個人—感性モデルとなるだろうか。もちろん、これは理念型としてということなので、実際の分析では混合している場合が多い。①の共同体モデルは、サブカルチャーの概念化では現在もマーケティング分析で強くみられるモデルである。このモデルにおいては、サブカルチャーは「ウェイ・オブ・ライフ」であり、かなり境界が明確なものとして考えられることが多い。研究の系譜でいえば、CCCS 前期の文化主義の論者にこのモデルが濃厚に

出ている。内部を統一したものとみなし、外部との差異に着目するので、「差異モデル」ともいえよう。

②のアリーナ・モデルは、そのサブカルチャーが持つ価値や信念や行動様式が外部との関係によって、ヘゲモニーのプロセスにおいてどのようなダイナミクスやメカニズムに巻き込まれているのかに着目する。その意味で、サブカルチャー内部と外部の間の境界は固定されず、常に葛藤による流動性を帯びていることになるので、その意味で「関係性モデル」とよべるかもしれない。また、この視点は、ホールのグラムシのヘゲモニー論導入で新たに出現したモデルともいえる。

③の個人—感性モデルは、ポスト CCCS 派が主に提出しているモデルである。サブカルチャーは個人的な感性の水平的なネットワークと、自由や快樂への追求のなかでの個人の自己表現であるとする。たしかに、現在の消費行動はこのような観点で、その多くは説明できようが（このモデルも 1980 年代からマーケティング分析で繰り返し使用されたことがある）、あるサブカルチャーが一般的／通念的な枠組みとは異なる信念や価値観、行動様式を強く提出している場合、このモデルは使えない。

この三つのモデルはあくまでも理念型であるので、サブカルチャーはどの側面も持つかもしれず、一つのモデルにあらかじめ規定することなく分析すべきだと思われる。

2) サブカルチャーにおける「抵抗」

第二の争点は、サブカルチャーにおける「抵抗」の性格である。たしかに、先験的にサブカルチャーの性格を「抵抗」だと規定してしまえば、それはもはや社会学的な分析ではないだろう。しかしながら、ポスト CCCS 派のように、「抵抗」の軸を拒否することも同様に社会学的な態度ではない。

これまでのサブカルチャー分析が示すように、サブカルチャーには多様な性格が存在する。その性格として「特定のモノ・商品や事象へのこだわり」「快樂／めまい／非日常／新奇性への志向」「卓越化／差異化」「抵抗」「自由」などが、これまでに報告され、解釈されている。これらに共通する性格は、「現在あるものとは異なるものへの志向」であるといえる。あるいは、1975年にC.S. フィッシャーが「アーバニズムのサブカルチャー理論に向けて」とする論文で採用した「非通念性 (unconventionality)」であるとしてもよい。フィッシャーは、都市社会においては社会の支配的ないし伝統的規範から外れている行動や信念（すなわち、サブカルチャー）が形成されやすいことを指摘し、それを「通念にとらわれない (unconventional)」性格として規定した。そして、そのサブカルチャーの「非通念性」は、犯罪・非行のような逸脱側面もあれば、新しい価値を創造するような革新性の側面もあるとしたのである (Fischer, 1975=1983)。

このフィッシャーの指摘を使用すれば、サブカルチャーの暫定的な定義は、「通念的なものから距離がある部分的な文化」あるいは「通念的なものから距離のある価値・信念・行動様式などが認められる部分的な文化」とすることができよう。いずれにせよ、サブカルチャーの性格として「非通念性」すなわち、「通念的ないし当該社会における常識的なものから距離が認められる」ということが肝要であろう。

しかしながら、通念的なあり方から「距離」が生じたとしても、それらが常に同じベクトルを持つとは限らないのではないか。つまり、あるサブカルチャーは、通念的な観点からは距離があるのだが、その「距離」は逆説的にも「通念的 (=体制的) なものの過剰な反復」(過剰反復性) によって生じていることもありうると思われるのである。

その具体的なサブカルチャーとしては、いわゆる「アキバ系 (オタ

ク)」と呼称される男性サブカルチャーが該当するように思われる。アキバ系サブカルチャーは、主としてアニメやマンガの（二次元的）「美少女キャラクター」を中心に構成されている。当事者たちは、そういったキャラクターに関するグッズ（フィギュア、ゲームやファンが二次的に製作するポルノグラフィーや同人誌など）を収集し、そのキャラクターを彷彿とさせる女性ウェイトレスのいる「メイド・カフェ」などの顧客となってきた経緯から、「奇妙な（非通念的な）」行動様式を持つ「オタク」として社会的に認知されてきた。

このサブカルチャーのなかでは、「美少女で、男性を癒すメイド」¹⁴⁾がアキバ系サブカルチャーの当事者たちの欲望の対象となっており、実際にかれらの間では「自分自身と美少女キャラクターの仮想的恋愛関係（またはパターンリスティックな「後見」関係）」がモチーフである。だが、これはジェンダー的観点からみれば、異性愛主義であり、しかもその美少女キャラクターを男性である自分に「ケアしてくれる可愛い性愛的な存在」としてみなすことから、かれらの価値観は徹底して現行のジェンダー体制そのものである。すなわち、この徹底して「体制的な」性別秩序内部の価値観や意味が、しかし通念的ではない「美少女キャラクターへの執着」をめぐって、単に過剰に「反復」されているに過ぎないのである。したがって、アキバ系サブカルチャーの「非通念性」は、たしかに「距離」は生じているが、単なる体制的な価値観の「過剰な反復」であり、新しい価値観や意味を創造するような側面はほとんどないといってよいだろう。

だが、サブカルチャーのなかには、その「非通念性」は距離があるだけでなく、体制的な軸そのものからの「離脱」ベクトルを持つものも存在する。この場合、サブカルチャーとはいうものの、むしろカウンターカルチャーに近いというべきかもしれない¹⁵⁾。その意味で、この離

脱性ベクトルが「抵抗」という方向性に最も近いといえることができる。

具体例としては、女性の〈やおい〉サブカルチャーがこれに相当するように思われる。このサブカルチャーは、アキバ系サブカルチャーと同様にアニメ、まんが、TVドラマ、小説などのポピュラーカルチャーにおけるキャラクターをメディアとして利用する。しかし、それらの男性キャラクター同士の関係をことごとく「恋愛関係」に変換したり、あるいはオリジナルな創作として「男性同士の恋愛」物語を産出するという非通念的な性格を持つサブカルチャーである¹⁶⁾。

この〈やおい〉サブカルチャーにおいては、一見すると女性たちが男性同性愛の物語を創出しているようだが、当事者の観点からすれば、「男性同性愛の物語ではなく、たまたま恋愛の相手が同性だった」物語だと意味づけられる場合が多い。そして、この〈やおい〉物語の着目すべき特徴は、男性キャラクターが性愛や欲望の対象と設定されることである。現行のジェンダー秩序における体制的な性文化では、もっぱら女性が全面的に性愛化され、欲望の対象とされることを考えてみれば、このサブカルチャーにおける性的身体の意味がいかに体制的な枠組みから「離脱」しているかがわかる。

以上のようなサブカルチャーの性格（体制的枠組みの「過剰反復性」と「離脱性」という相反するベクトルをそれぞれもつ）は、当事者たちが産出する表象やテキストなどをドキュメント解析法等で分析すれば、抽出可能なものである。そうであるのに、しばしば、その類似した非通念性から一括して「同類のサブカルチャー」と判断してしまえば、事象の性格や方向性の正確な把握をしそこなうことにもつながる。

たとえば、ある日本の若年層サブカルチャー分析は、戦後から現在までの代表的なサブカルチャーを分類している。そこでは、クラス、世代、ジェンダー、メディア、ローカリティという5つの「資源」で、1950

年代の「太陽族」から 90 年代後半の「裏原系」までのサブカルチャーの分類で、80 年代の代表的例として「オタク」が取り上げられている。この 5 つの資源にそって、「オタク」はクラス要因として影響は無く、メディアはアニメ、コンピュータ、世代は新人類世代、ローカリティは自室や秋葉原、ジェンダーは「ジェンダーフリー」であり、関連するユース・サブカルチャーには「Nerd、ハッカー、スラッシャー」があると分類されている（難波、2003: 114-117）。この分析では、何を根拠に「ジェンダーフリー」（ジェンダーに関しては、関係がないということか？）としているのかが不明であるし、関連するサブカルチャーに「スラッシャー（英語圏における〈やおい〉）」をあげているからには、この論者はアキバ系と〈やおい〉を同等のものとみなしてしまっている。ここには、類似した非通念性から一括して同類のサブカルチャーとみなしてしまう誤謬があるのではないか。すなわち、ここで等閑視されていることは、先述したように、「非通念性」があるとしてもベクトルが異なる場合があるということである。体制的な意味や価値観を「過剰に反復」する非通念性と、そういった枠組みから「離脱」を示す非通念性があり、これらは性格的には別物とっていいほど内容が異なるのである¹⁷⁾。

以上の例も含めて、これまでのサブカルチャー研究において、やはりジェンダーの観点からの分析はそれほど深まっていはいないと言わざるをえないだろう。とくにポスト CCCS 派のクラブ・カルチャーやレイヴ分析においては、「ユニセックス化」「ノンセックス化」「ジェンダーレス」といった反マチズモ的キーワードが強調されがちであるが、サブカルチャーにおけるジェンダー関係はそれほど単純なものではない。たしかに、多くの論者が指摘するように、初期のレイヴ・シーンなどではジェンダー要因が希薄な雰囲気が生じていたかもしれない。しかし、だか

らといって他のサブカルチャーにおいてもすべてそうだとは言うことはできないのである。

たとえば、L. ルブランのパンク・サブカルチャーの中の女性パンク (punk girls) について、当事者のインタビューを中心に構成されたエスノグラフィー研究が良い証拠である。女性パンクは、パンクという非通念的なサブカルチャー世界のメンバーになることにより、自分自身を力づけている側面がある。それと同時に、もともと男性優位主義的価値観の強いパンク文化に入ることにより、内部の男性パンクと一般社会の性的なハラスメントという二重の困難ないしは葛藤に直面していることが明らかになったのである。

これらのことから、サブカルチャー研究には当事者の創出するドキュメントや表象分析はもちろん、インタビューを含めて一次的な事例調査が重要であり、安易な一般化はできないことがわかる。

おわりに

一般的な社会的文脈においては、80年代ごろからサブカルチャーはマーケティングの対象になり、マスコミ等の風俗的興味のテーマとなってきた。90年代の半ばごろからは、欧米を含む海外での日本のアニメやマンガなどへの注目が拡大してきた経緯から、今後ともサブカルチャーに関する考察は続くことになると思われる。

日常生活におけるポピュラーカルチャーの浸透と消費社会化の進展によって、社会を管理・統治する権力の作用がますます不可視になる状況において、J. ハーバマスの均質な「市民的公共性」に新しい意味やコードの創出をみようとするような議論は現実味が薄れてしまっている。ポストフォーディズム時代における経済的文化的格差の拡大が、フォーマ

ルな公共的空間に参加できる社会層を減少させる状況があるからである。

そもそも、フォーマルな公共空間へのアクセスには、言語的な資源が必要であり、その質の優劣によって公共性への実質的なアクセスが可能かどうかが決まるインフォーマルな排除の問題がからんでいる（斎藤、2000: 8-11）。当然、そのアクセスは経済的、教育的、文化的資本が豊富な社会層に有利に働く。

それでは、フォーマルな公共空間へのアクセスが困難な社会層が自らの日常生活で生じた問題や異議をどこへ持っていくのか。そうした必要性にかられて形成されるのが「対抗的公共圏」（N. フレイザー）である。そこでは、フォーマルな言語資源とは異なる表現や言葉が使用されながら、新しい意味やコードが創出される可能性が高い。

同様なことは、A. メルッチも指摘している。メルッチは、社会運動が公的にデモ行動などに結実することのほうが稀であり、むしろ日常的な水面下の文化的実験室のネットワークによって、その潜在力は醸成されているという。

もちろん、これらにサブカルチャーが相当すると早々と規定してしまうわけにはいかないだろう。だが、それでもサブカルチャーがそのような「対抗的公共圏」あるいは「水面下の文化的実験室」となりえている可能性もまた否定できないのである。

〈注〉

- 1) D. Chaney (1994) が、著作の題名としてこの用語を最初に提出したとされている。
- 2) 社会的闘争や異議申し立てについての解釈におけるアカデミズム内の分断を、縦軸に「近代（モダン）に対する立場（懐疑と肯定）」と横軸に「現状に対する態度（肯定とラディカルな批判）」との二つの軸から、四類型をして分析したことがある。そこで判明したことは、横軸の間の分断よりは、縦軸の分断のほうが表層的でないために、よけいに分断が錯綜して、自分の批判の対象が不鮮明になるということであった（笠間、2005）。

- 3) 女性やマイノリティの文化的次元における異議申し立てを「特殊個別的なアイデンティティ政治」とみなす解釈は、イーグルトンと立場的に近い N. フレイザーも共有している。このフレイザーの見方に対して、J. バトラーと論争が生じたことがある。
- 4) The Centre for Contemporary Cultural Studies の略。
- 5) ホガートやウィリアムズなどの前半期をさして「文化主義」、ホール以降の「構造主義」の二つのパラダイムが CCCS 内に存在し、常に理論的立場の緊張があったとされる。
- 6) S. ソーントンの『クラブ・カルチャー』(1995) や S. レッドヘッドらのマンチェスター大学ポピュラーカルチャー研究所の「ポピュラーカルチャー・スタディーズ」アプローチなどは、CCCS アプローチの再検討から自分たちの立場を明確にしているという (Weinzierl & Muggleton, 2003: 4)。
- 7) 2003 年のアンソロジーが扱っている具体的なサブカルチャーは、ボンデージ・パンクおよびアナルコ・パンク、DIY 抗議文化、テクノ・トライブ、モダン・プリミティヴ、ラティノ・ギャング、ニュー・ウェーブ・メタラー、ネット・ゴスなどである (Ibid: 7)。
- 8) ソーントンのサブカルチャー資本という概念は、ブルデューの階級的な対応のある文化資本とは異なる「援用」概念である。
- 9) 以下、マグルトンは特に別記がない場合、『Inside Subculture』(2000, Berg) からの引用である。
- 10) カウンターカルチャーは、60 年代に登場したヒッピー、フラワー・チルドレン、イッピーなどの「代替的な」中流若者文化を指すと CCCS はしている。カウンターカルチャーがサブカルチャーと異なるのは、①支配文化に対する明らかに政治的イデオロギー的な対立形式、②巧妙な「代替的」機関 (アングラ新聞、コンミュン、共同組合、反キャリアなど)、③ティーン・エイジ後の過渡段階への延長、仕事・家庭・家族・学校・レジャーなどの間の区別が曖昧な点、であるという (Hebdige, 1979=1986: 206-207)。
- 11) 「アーバン・トライバル・スタディーズ」の立場を模索する上野も、ポスト CCCS 派の分析が、サブカルチャーと政治や権力関係との対峙や文化政治を析出するのではなく、ひたすら「個人主義の集団的表現」に帰結させるところが、そのまま時代状況を反映したものになっており、「一種の循環論」ではないかと指摘している (上野、2005: 28)。
- 12) 同様な概念用語に、「脱組織資本主義」「柔軟な専門化」「フレキシブルな蓄積」「グローバルな女性化」などがある。
- 13) バウマン自身は、リキッド・モダニティ、すなわちポストモダニティに対して批判的立場をとっている。

- 14) アキバ系サブカルチャーで人気のある美少女キャラクターは、「メイド」の他にも「少女戦士」「どじっ子」「メガネっ娘」「妹」など、ある身体的・性格的特徴で抽出できる。いずれも「最後には男性につくすかわいい女の子」キャラクターということが共通している。
- 15) 本稿では、カウンターカルチャーは、サブカルチャーの一種であると概念区分をしている。つまり、サブカルチャーのなかで、何らかに對する「カウンター性」の軸が強く出ているものをカウンターカルチャーとしてとらえるということである。
- 16) 〈やおい〉サブカルチャーそのものは、アキバ系サブカルチャーよりも創出時期（1970年代前半）が早く、しかも米国でも同様な女性のサブカルチャーが、ほぼ同時期に独自に創出されている。最近のマスコミ用語では、「腐女子（フジョシ）」と呼ばれている。
- 17) 「体制内であっても、それを過剰反復すれば、現行体制とは異なるあり方が創出される」とみる考え方も当然あるが、その場合、解釈する側の「深い読み込み」が混入する可能性が大きい。ここでの立場は、まずは観察できる範囲における解釈を心がけるということである。

〈引用・参考文献〉

- Bauman, Z., 2000, *Liquid Modernity*, Polity Press. (森田典正訳、2001、『リキッド・モダニティ』大月書店)
- Bennet, T. et al. (eds.) 1981, *Culture, Ideology and Social Process: A Reader*, Open University Press.
- Chaney, D., 1994, *The Cultural Turn: Scene-setting Essays on Contemporary cultural History*, Routledge.
- Clarke, J., 1975, "Style," in Hall and Jefferson (eds.)
- Eagleton, T., 2000, *The Idea of Culture*, Blackwell. (大橋洋一訳、2006、『文化とは何か』松柏社)
- Fischer, C., 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism." (「アーバニズムの下位文化理論に向けて」奥田道大・広田康夫訳『都市の理論のために』多賀出版、1983)
- Fraser, N., 1999 (「公共圏の再考：既存の民主主義批判のために」C. キャルホーン (編) 山本啓・新田滋訳『ハーバマスと公共圏』未来社)
- Gilroy, P., 1987, *There Ain't No Black In The Union Jack*, Hutchinson.
- Hall, S. and T. Jefferson (eds.) 1975, *Resistance Through Rituals*, Routledge.
- , 1989, "The Meaning of New Times," in Hall, S. et al. (eds.) (『現代思想』1998年、vol. 26-4)

- et al. (eds.) 1989, *New Times*, Lawrence and Wishart.
- and 陳光興、1996、「あるディアスポラの知識人の形成」『思想』859号
- Hebdige, D., 1979, *Subculture: The Meaning of Style*, Methuen. (山口淑子訳、1986、『サブカルチャー：スタイルの意味するもの』未来社)
- Jenks, C., 2005, *Subculture: The Fragmentation of the Social*, SAGE Publications.
- 笠間千浪、2005「社会的闘争における〈経済〉と〈文化〉：「文化的的転回」をめぐる議論を中心として」濱口晴彦監修『社会学が拓く人間科学の地平』五紘舎。
- Leblanc, L., 1999, *Pretty in Punk: Girls' Gender Resistance in a Boys' Subculture*, Rutgers University Press.
- Maffesoli, M., 1988, *Le Temps des Tribus*, Meridiens Klincksieck. (古田幸男訳、1997、『小集団の時代』法政大学出版局)
- McRobbie, A. and M. Garber, 1975, "Girls and Subcultures," in Hall, S. and T. Jefferson (eds.)
- Melucci, A., 1989, *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*, Temple University Press. (山之内靖ほか訳、1997、『現在に生きる遊牧民：新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店)
- , 1981, "Settling Accounts with Subcultures: A Feminist Critique," in Bennet, T. et al. (eds.)
- Muggleton, D., 2000, *Inside Subculture*, BERG.
- and R. Weinzierl, (eds.), 2003, *The Post-Subcultures Reader*, BERG.
- 難波功士、2003、「ユース・サブカルチャー研究における状況的パースペクティブ：戦後日本社会を題材として」『関西学院大学社会学部紀要』第95号。
- Turner, G., 1996, *British Cultural Studies: An Introduction*, Routledge. (溝上由紀ほか訳、1999、『カルチュラル・スタディーズ入門：理論と英国での発展』作品社)
- 上野俊哉、2005、『アーバン・トライバル・スタディーズ』月曜社。
- Weinzierl, R. and D. Muggleton, 2003, "What is 'Post-Subcultural studies' Anyway?," in Muggleton, D. and R. Weinzierl (eds.)
- Yinger, J., 1960, "Contraculture and Subculture," *ASR*, vol. 25, no. 5.
- 吉見俊哉、2000、『カルチュラル・スタディーズ』岩波書店。